公開講演会記録

中国東北部長春市に残る旧満洲国時代の建物

元清水建設株式会社　主任技師・一級建築士　丸田洋二（会員）

はじめに

日本は日清・日露戦争後、台湾と朝鮮へ、その後中国東北部に進出している。植民地として統治した台湾と朝鮮、清朝最後の皇帝（愛新覚羅溥儀）を担ぎ出した傀儡国家満洲国を入れ、三つの国へ多くの日本人が移り住み国家を動かしていた。

しかし昭和20年8月、日本の敗戦でその活動に幕を閉じた。令和7年はあれから80年を迎えることになる。台湾、朝鮮、満洲は日本人の手により都市が造られ、百年近くたった今日でもその一端を見ることができる。

戦後80年、当時そこで国造りに関わった人も鬼籍に入り、昔を語る人もいなくなるのは寂しいことである。満洲国の国都新京に生まれた私は社会人になり建設会社に勤め、定年退職後満洲国の建築に興味を持つようになった。幸い会社のアーカイブに満洲国の建築関係の資料があり、それを利用できる立場にもあった。また当時現地において発行された『満洲建築雑誌』を入手できた。普段語られることのない満洲国の建築を述べてみたい。

満洲国の誕生と消滅

満洲・満洲国と言っても現在ほとんどの人には馴染みがないと思う。今から約１２０年前、日露戦争後のポーツマス講和条約（明治38「１９０５」年調印）によりロシアが敷設した東清鉄道南部線（長春北方の寛城子駅～旅順駅間約７５２キロ）が日本に割譲された。

この地帯は当時「満洲」と呼ばれていた。日本は鉄道を運営するため「南満洲鉄道株式会社（以下満鉄という）」を設立（明治39年）、そして鉄道沿線

および附属地を警備するため日本陸軍は関東軍を配置した。

満鉄沿線の大連、大石橋、鞍山、奉天、四平街、長春の都市には日本人が多く住むようになり、満鉄は国に代わり種々の施設を整えていった。

一方満洲の経営をどのようにしようかと企てていた関東軍は、昭和6年9月18日満鉄奉天駅（現・瀋陽駅）近郊の柳条湖で線路を爆破、これを中国人の仕業として満洲全土を制圧、その後、清朝最後の皇帝「愛新覚羅溥儀」を担ぎ出し昭和7年3月1日、日・満・鮮・漢・蒙民族による〝五族協和〟と〝王道国家・楽土建設〟を建国理念とする満洲国が誕生した。その後日本は米国相手に戦争に入り昭和20年8月敗戦、満洲国も消滅した。満洲国が存続した期間はわずか13年5か月であった。

戦前期外地における建築家の組織と建設業者

日本は20世紀の前半、二つの植民地（台湾、朝鮮）と一つの傀儡国家（満洲国）を持っていた。いずれも長期の支配を考え都市計画・産業振興・各種施設建設を行っていた。そこでは多くの建築関係者が活躍しており建築家や技術者の組織が誕生、活動の記録は機関誌に掲載されている。

台湾では『台湾建築會誌』、朝鮮では『朝鮮と建築』、満洲では『満洲建築雑誌』が発刊された。

ここでは**『満洲建築雑誌』**と清水建設が戦前発行した**『清水組 工事年鑑』**を基に中国東北部長春市に残る満洲国時代の建物を紹介する。

このなかで『満洲建築協會雑誌』は主として、満鉄関係の建築を取り上げている。昭和9年『満洲建築雑誌』と誌名を変えた後は満洲国の都市計画、竣工建物の紹介、暖房設備、外国の建築関係情報などが取り上げられている。

表1　戦前期 台湾、朝鮮、満洲における建築家の組織と機関誌発行状況

地　域	台　湾	朝　鮮	満　洲
組　織	台湾建築会	朝鮮建築会	満洲建築協会
発足年月	昭和4(1929)年1月	大正11(1922)年4月	大正9(1920)年11月
機関誌名	台湾建築会誌	朝鮮と建築	満洲建築雑誌 昭和8年まで 満洲建築協会雑誌
編集主体	台湾総督府官房営繕係	朝鮮総督府建築課	南満洲鉄道(株)建築課
創　刊	昭和4年3月	大正11年6月	大正10年3月
終　刊	昭和19(1944)年9月	昭和19(1944)年末	昭和20(1945)年1月
会員数	883人(昭和12年) (正・準・賛助会員を含む)	662人(大正13年) (会員種別は不明)	1,852人(昭和17年) (正・準・賛助会員を含む)
発刊数	82冊	約260冊	278冊

写真1：『満洲建築雑誌』（昭和9～20年までの一部）

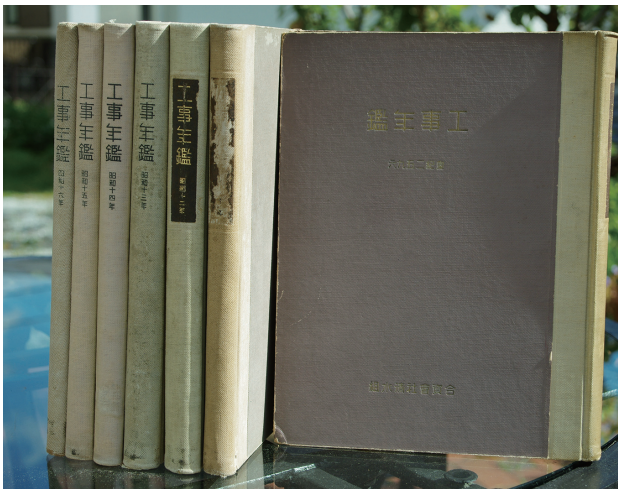


写真２：『清水組　工事年鑑』（昭和10～16年までの7冊）

しかし日本が戦争に入った後（昭和17年）は、都市の住宅難、建築資材不足に対応した簡易住宅、満洲開拓民の土造り住宅などに関する記事が多くなっている。

当時、日本から多くの建築家や技術者が中国東北部に渡り、理想の新国家建設を夢見てたくさんの建物を建築している。

満洲国の建築

昭和７年３月満洲国が建国、首都は吉林省長春に置かれ「新京」と改名された。一寒村にすぎなかったところに日本にない都市計画が実施され、政府庁舎、住宅、学校、病院、銀行、商店などが建てられ大きな都市が生まれた。いずれも日本人の設計、日本の建設業者が施工したものである。満洲国建国後最初に建築されたのは官庁で、これは着工順に第一庁舎（市公署）、第二庁舎（首都警察庁）、第三庁舎（財政部）、第四庁舎（国務院）、第五庁舎（民政部）、第六庁舎（外交部）、第七庁舎（司法部）、第八庁舎（交通部）、第九庁舎（治安部）、第十庁舎（経済部）と呼ばれている。

これと並行して政府代用官舎、教育施設、病院、商店、住宅その他多くの建物が建てられた。以下に現在も使われている主な建物を紹介してみる。

第一庁舎と**第二庁舎**は同じ平面の２階建て建物で外観に違いを見せている。第一庁舎は戦後建て替えられ、長春市人民政府の庁舎となっている。

また**第三庁舎**と**第五庁舎**も同じ平面の２階建て建物である。建国間もない時期で、早期の建築が要求されたので、同じ設計図を利用したものと思われる。

平成28年６月、屋根瓦葺き替え工事

写真３上：第一庁舎（特別市公署、1945年以降建て替えられた）
写真４下：第二庁舎（首都警察庁、現・長春市公安局）
（いずれも『満洲建築協會雑誌』昭和８年11月号掲載）

中の第五庁舎を見学する機会があり屋根に上がると、工事担当者から「キョミズ組の棟札があります」と言われた。さっそく建物中央の宝形屋根小屋組（木造）を見ると「満洲國第五廳舎施工清水組」の棟札が見えた。

日本では戦前の古い建物の屋根裏に棟札が見られるが、満洲国の建物にも**棟札**が残っているのを見たのは、私が初めてではないだろうか。

この後の庁舎は４階建てになり、外観のデザインにも工夫がなされている。

写真５：第三庁舎（財政部、現・浦東発展銀行支店。偽満皇宮博物院提供）

写真７：第五庁舎中央宝形屋根小屋組に取り付けられた棟札（北京房修一建築工程有限公司提供）

写真６：第五庁舎（民政部、現・吉林省石油化工設計研究院。清水建設所蔵）

写真９：第九庁舎（治安部、現・吉林大学第一医院）

写真８：第四庁舎（国務院、現・吉林大学医学院）

その一つが外壁のタイルで、当時日本でも流行した**スクラッチタイル**が多用されるようになった。

なかでも**第四庁舎**と**第九庁舎**は当時の順天大街（現・新民大街）始点の左右に建設され圧倒的な大きさを誇っている。

建物の外壁にはスクラッチタイルが貼られ、庁舎建築の風格を今も漂わせている。

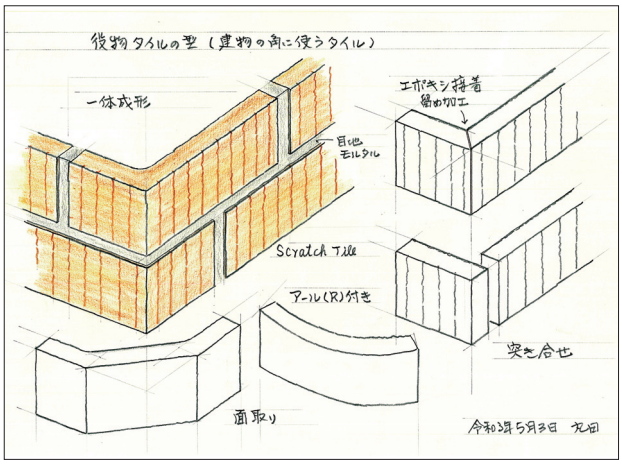


写真10：スクラッチタイル説明図。当時は左上の一体成形タイルが使われていた

満洲国皇宮の建築

「皇宮」とは日本でいえば皇居に相当するものである。満洲国皇帝愛新覚羅溥儀の居城で、多くの建物が残っているが、ここでは代表的な勤民楼と同徳殿を紹介する。

勤民楼は明治44年建造の吉黒権運局の建物（煉瓦造２階建）を満洲国建国時執政府として利用したものである。昭和９年３月１日の帝政移行に伴い、この建物の大改修工事が極寒の１月７日から２月28日にかけて行われた。溥儀は**勤民楼**と命名して満洲国崩壊の日までここで執務していた。昭和21年２階部分が火災で焼失し、応急的に修理されたが、平成12年から復元工事が行われ平成17年に完了している。

写真11：第十庁舎、経済部（現・吉林大学白求恩［ベチューン］第三医院）。外壁はテラコッタタイル

一方勤民楼は満洲国皇帝溥儀の住まいとしてあまりにもお粗末なので、順天大街の北に大きな宮廷建築が計画されていた。

しかし工事期間が長期にわたるので、仮の宮廷が皇宮内に建設されることになった。これが**同徳殿**である。

鉄筋コンクリート造２階建て、一部地下あり。屋根は木造トラス組瓦葺き。屋根瓦は黄金色、大棟と隅棟に鴟尾（しび）・

写真12：満洲国皇宮内の中心的な建物、勤民楼。口の字形の平面形状で内部は吹抜け

鴟吻・螭吻を備え、皇帝の住む建物にふさわしい造りになっている。

1階には大きなホール、貴賓応接室、映写室、ピアノ演奏室、ビリヤード室、東南部に日本間などを備えている。

2階には溥儀の執務室と寝室、側室の書斎と寝室、化粧室がある。

溥儀は日本が建てたこの建物に盗聴装置が仕掛けてあると見て利用しなかったと言われている。

皇宮内の建物は当時のまま残され、「偽満皇宮博物院」として中国国民の社会教育施設として公開され、連日多くの参観者が訪れている。

写真13：同徳殿正面玄関、建物は南面し長辺約90m、奥行約25m

関東軍の建築

満洲国を支配した関東軍は、大連西方旅順の庁舎をいち早く移転、新京に「関東軍司令部」を新設している。

この建物は現在「中国共産党吉林省委員会」が使っている。門の前に立ちカメラを構えると、すぐに門衛（公安）が制止する厳しさである。平成28年5月特別の許可を得て内部に入ることができ、内外の写真撮影ができた。外観は当時のままであるが、正面下層入母屋屋根懸魚下の菊の御紋はなくなっている。建物は洋風建築の屋上に瓦葺きの屋根をいただく帝冠様式である。

写真14：関東軍司令部庁舎、玄関前の樹木が成長して建物全景は撮れない

この**関東軍司令部庁舎**の7万6000平方㍍におよぶ広大な敷地の西側、森に囲まれたところに「関東軍司令官邸」がある。

関東軍司令部庁舎と**司令官官邸**の建物外壁タイルは、当時よく使われてい

写真15：関東軍司令官官邸、ヨーロッパの古城を思わせる煉瓦造の建物

写真17：満洲電信電話株式会社（現・中国移動通信の社屋。『満洲建築雑誌』昭和10年11月号掲載）

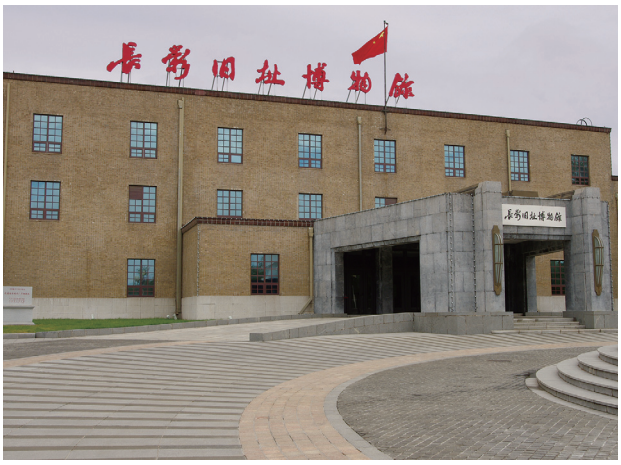


写真16：満洲映画協会（現・長影旧址博物館）正面建物の裏に煉瓦造のスタジオがある

たスクラッチタイルである。

司令官官邸は現在、宿泊・迎賓施設への改修工事が行われている。

満洲で娯楽映画を制作していた**満洲映画協会**のスタジオを持つ大きな建物も関東軍の発注である。

正面に事務部門の3階建て建物があり、裏には煉瓦造の階高の高いスタジオ6室を持つ建物は現在「長影旧址博物館」として一般に公開されている。

写真18：満洲中央銀行総行（現・中国人民銀行長春分行）

公共施設などの建築

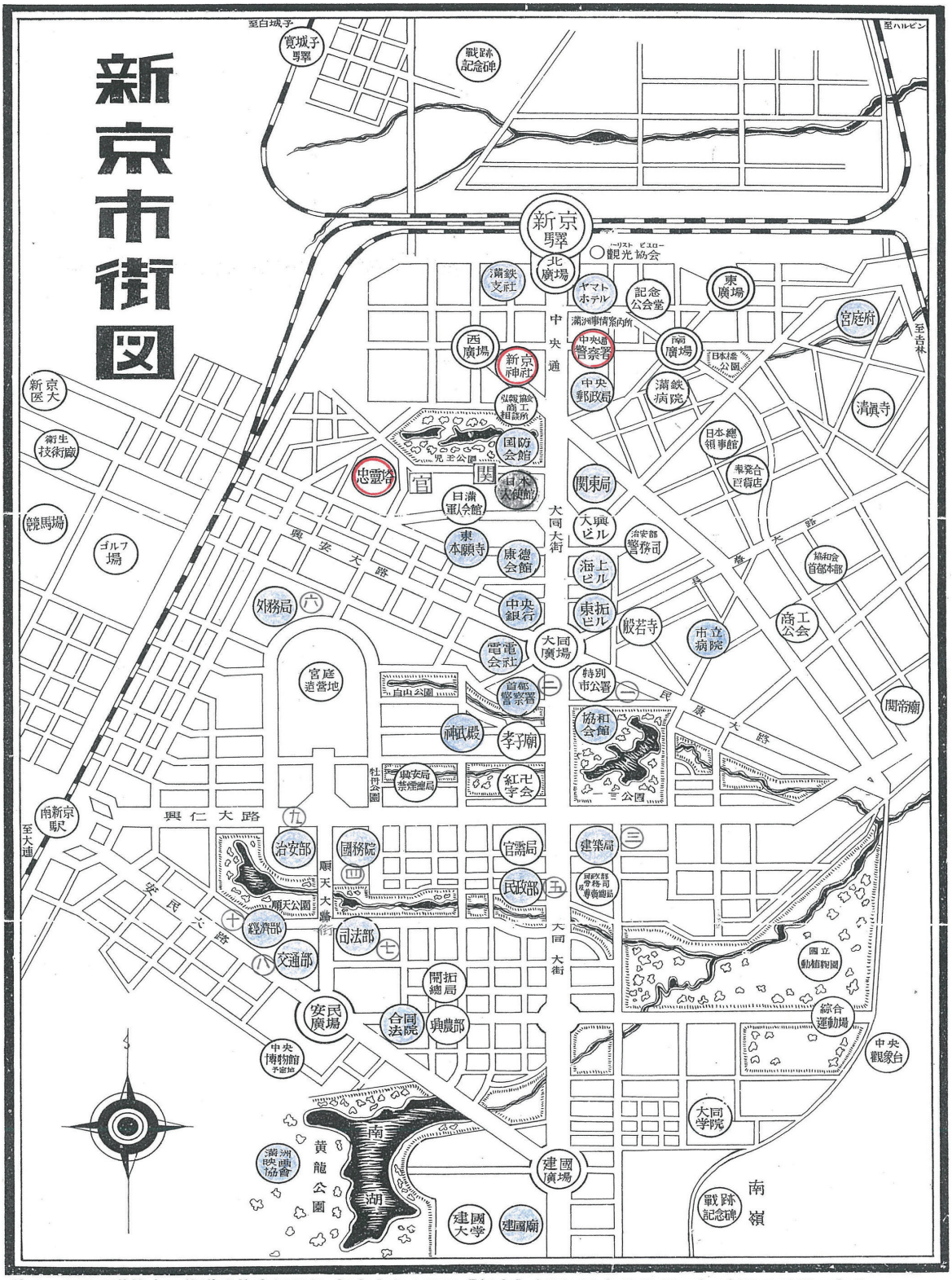
満洲国建国後、新京特別市（現・長春市）の都市計画がまとまると多くの役所、公共団体・企業などが進出、事務所を構えるようになった。

まず中心部の大同広場に面して**満洲電信電話株式会社**と**満洲中央銀行総行**建設の槌音が響いた。

新京駅前には**新京満鉄綜合事務所**が、その延長にできた「大同大街」の東側には**新京特別市立医院**、西側には**新京神武殿**が建設された。

これらと並行して教育施設、医療施設、住宅、舎宅、店舗、宗教施設など

写真19：新京満鉄綜合事務所（現・長春鉄路事務所）



註1　当図は滿鐵奉天鐵道局旅客係発行　都市案内小冊子『新京』（昭和16年7月10日）の折込み地図である

註2　図中の㊀～㊉は廳舎番号、関は関東軍司令部廳舎、官は関東軍司令官官邸を示す

註3　●は現存建物を、○は解体された施設を示す

表２　長春市に残る満洲国時代の主要建物建築概要

2024年12月24日執筆者作成

分類	当時の建物名称 現在の建物名称	構造 規模	建築面積(㎡) 延床面積(㎡)	建築工事費 坪単価(円/坪)	着工年月日 竣工年月日	設計者 施工者	掲載雑誌 注記
政府庁舎	第一庁舎 特別市公署	RC幕壁造	2,178.0	298,184	昭和 7年 7月20日	需要処営繕科	『満洲建築協会雑誌』
	解体して建替え	B1-2F-P4	5,131.0	192.1	昭和 8年 5月30日	福井高梨組	昭和 8年11月号
	第二庁舎 首都警察庁	RC幕壁造	2,178.0	303,083	昭和 7年 7月31日	需要処営繕科	『満洲建築協会雑誌』
	長春市公安局	B1-2F-P4	5,203.0	192.5	昭和 8年 6月15日	三田組	昭和 8年11月号
	第三庁舎 財政部(建築局)	RC幕壁造	2,190.0	246,000	昭和 8年 5月	需要処営繕科	『建築雑誌』昭和10年 4月号
	浦東発展銀行	B1-2F-P1	5,319.0	152.9	昭和 8年12月	清水組	工事費は清水組資料による
	第四庁舎 国務院	RC幕壁造	4,510.0	約250万円	昭和 9年 7月19日	需品局営繕科	『満洲建築概説』 p.451
	吉林大学医学院	B1-4F-P2	19,115.5	(付帯設備込)	昭和11年11月20日	大林組	『満洲建築雑誌』昭和12年 1月号
	第五庁舎 民政部	RC幕壁造	2,190.0	270,000	昭和 9年 4月	需要処営繕科	『建築雑誌』昭和10年 4月
	吉林省石油化工設計研究院	B1-2F-P1	5,319.0	167.8	昭和 9年11月	清水組	工事費は清水組資料による
	第六庁舎 外交部(外務局)	RC幕壁造			昭和10年　月	仏国のBROSSAD-MOPIN社	『満洲建築雑誌』昭和11年 7月号
	太陽会大飯店	B1-2F			昭和11年　月	設計・施工	
	第七庁舎 司法部	RC幕壁造			昭和10年 4月	営繕需品局	『満洲建築雑誌』昭和11年 8月号
	吉林大学医学部	B1-3F-P2			昭和11年 8月		
	第八庁舎 交通部	RC幕壁造	1,980.8	446,706	昭和11年 8月18日	営繕需品局	『満洲建築概説』 p.449
	吉林大学予防医学院	B1-3F-P1	8,068.5	183.0	昭和12年12月10日	長谷川組	『満洲建築雑誌』昭和13年 2月号
	第九庁舎 治安部	RC幕壁造	3,299.0	1,011,937	昭和11年 8月	営繕需品局	『満洲建築概説』 p.449
	吉林大学第一医院	B1-4F-P2	15,789.2	211.8	昭和13年11月	大林組	『建築雑誌』昭和13年 6月号
	第十庁舎 経済部	RC幕壁造	2,142.0	774,000	昭和12年 7月17日	需品局営繕科	『満洲建築概説』 p.449
	吉林大学第三医院	B1-4F-P1	10,254.0	249.5	昭和14年 7月31日	清水組	『満洲建築雑誌』昭和14年11月号
	中央法衙/合同法院	SRC幕壁造	3,852.2	848,667	昭和11年 6月25日	営繕需品局	『満洲建築概説』 p.449
	解放軍461医院	B1-3F-P2	14,882.3	188.5	昭和13年 7月31日	高岡組	『建築雑誌』昭和13年 9月号
皇宮	勤民楼	煉瓦造	603.0	47,889	昭和 9年 1月 7日	需要処営繕科	『満洲建築雑誌』昭和 9年 3月号
	偽満皇宮博物院	2F	1,206.0		昭和 9年 2月28日	清水組	工事費は清水組資料による
	仮宮廷(同德殿)	RC造	1,868.0	561,000	昭和12年 4月	営繕需品局	『満洲建築概説』p.449
	偽満皇宮博物院	B1-2F	3,571.1	519.2	昭和13年11月	戸田組	『解密 偽満皇宮』p.49
関東軍	関東軍司令部庁舎	RC幕壁造	3,277.0	1,700,000	昭和 7年 8月	関東軍経理部	『満洲建築雑誌』昭和 9年11月号
	中国共産党吉林省委員会	B1-4F-P1	13,424.0		昭和 9年 8月	大林組	工事費に輸送費人件費は含まず
	関東軍司令官官邸	煉瓦造	≒1,400	328,000	昭和 8年 5月	関東軍経理部	『満洲建築雑誌』昭和 9年 9月号
	内外改修工事中	B1-2F-P1	≒2,700		昭和 9年 7月	清水組	工期、工事費は清水組資料による
	満洲映画協会	RC幕壁造	11,286.7	938,104	昭和13年11月 1日	関東軍経理部	『満洲建築雑誌』昭和15年 3月号
	長影旧址博物館	B1-3F	17,450.9	177.7	昭和15年 3月31日	清水組	工期、工事費は清水組資料による
企業等	満洲電信電話株式会社	RC幕壁造	3,967.7		昭和 9年 3月30日	満洲電信電話	『建築雑誌』昭和13年 9月号
	中国移動通信	B1-4F-P1	17,424.2		昭和10年10月30日	高岡又一郎	『満洲建築雑誌』昭和10年11月号
	新京満鉄綜合事務所	RC幕壁造	1,839.8		昭和10年 6月13日	満鉄本社地方部	『満洲建築雑誌』昭和12年 3月号
	瀋陽鉄路局長春事務所	B1-4F-P1	9,724.0		昭和11年 7月 9日	錢高組	
	新京特別市立医院	RC幕壁造	2,575.3		昭和10年 7月10日	新京特別市公署	『建築雑誌』昭和13年 9月号
	吉林大学第二医院	B1-4F	9,128.7		昭和11年10月30日	大同組	
	満洲中央銀行総行	SRC造	4,100.0	約500万円	昭和 9年 4月	西村好時	『満洲建築雑誌』昭和13年11月号
	中国人民銀行長春分行	B2-4F-P1	26,075.5	(付帯設備込)	昭和13年 6月	大林組	
	新京神武殿	RC幕壁造	1,839.8	1,400,000	昭和10年 6月13日	満洲帝国武道会	『満洲建築雑誌』昭和16年 4月号
	吉林大学講堂	B1-4F-P1	9,724.0		昭和11年 7月 9日	竹中工務店	

註1　建築構造は鉄筋コンクリート造はRC、鉄骨鉄筋コンクリート造はSRCとする。
註2　満洲国で発達した柱・梁・床版が鉄筋コンクリート造、内・外壁を煉瓦積みにした構造はRC幕壁造とする。
註3　建物階数表示は地下はB、地上はF、塔屋はPとする。
註4　政府庁舎および皇宮設計者の組織名は満洲国に属するものである。
註5　表には建築工事費を記載している。附帯設備(電気、給排水、暖房)工事費は、(建築+附帯設備)の約30%と見てよい。
註6　第十庁舎(経済部)の建築工事費には附帯設備工事費が含まれている。
註7　中央法衙(合同法院)の延床面積は『建築雑誌』に74,859.57㎡と記載されているが、「1」を「7」と誤植している。

写真20：新京特別市立医院（現・吉林大学第二医院）

写真21：新京神武殿（現・吉林大学講堂）

が整備されていった。

これらの建物は昭和16年満鉄発行の都市案内小冊子に折り込みの**「新京市街図」**（9頁参照）に示されている。

結びにかえて

満洲国の首都として「新京」が輝いたのはわずか13年5か月の期間であった。その間首都機能が拡張され多くの建物ができ、多くの日本人が移住し、一大都市ができた。当時そこで活躍していた人は、満洲は戦場から遠く離れており日本が負けるなど思ってもいなかっただろう。

しかしこの都市建設は多くの中国の人の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはいけない。戦後80年、そこには満洲国時代の建物が多く残り中国の人はそれを壊すことなく利用している。「歴史はものがないと語れない」と言われているので大変ありがたいことである。

建築の分野で一時代を築いた「満洲国の建築」は、人々の記憶から忘れ去られようとしている。筆者はこのことを少しでも知ってもらいたく、この一文をしたためた次第である。

願わくは、冬は零下20度以下に凍える極寒の地で、工期尋常ならざる現場において活躍した建築技術者や職人のことに思いを馳せていただきたい。

＊文中に断りのない写真は２０１１年11月～17年9月の期間に筆者が撮影。

（２０２４年11月21日・公開講演会）

筆者略歴（まるた・ようじ）

１９４２年1月満洲国新京特別市に出生。１９６５年3月福岡建設専門学校建築科卒業。１９６４年4月清水建設株式会社九州支店入社、設計部構造設計課配属、その後九州支店管内現場および建築技術部勤務。２００２年1月定年退職。丸田建築仮設計画事務所設立、現在に至る。